仲居　若者　牛　禿

き、遣手にあふてことづてをし、

〔賤者考〕此遊廓に屬したる工商は、皆他よりいやしめらる、まして幇間、仲居（タイモコチナカヰ）、江戸にては、吉原には男を用ひて若者といふ、深川にては、女にて輕子といふ、○中略　花車（中略）引船、仲居、花車は、京浪花にのみいへり、○下略

〔嬉遊笑覽九　娼妓〕ぎうは散茶みせより起りし名なりといへり、洞房語園に、待乳問答といふ文澤氏何某が遊女の名よせの内に、一座に花をちらすべし、さかうして、花車頓に廻り、牛すみやかに走り、女郎よくなびくと有、これも車よりいひ出しことゝ、みゆ、然るを原本洞房語園に、風呂屋の僕の脊むしなるがありて、きせるを不斷腰にさしたる形、及の字に似たるより始まれりといへるは非なるべし、五元集拾遺十及圖序云、往昔異邦の佛鑑禪師、十牛を圖して、人間迷悟の間を考めされたり、其書を狂言にし取て、牛は聲音妓有なり、又及ともゝてあつかふは俳なればなり、爰に圖を畫讃し侍て、笑を萬世に殘すもの、晉其角といへり、是又及の說をとれるは誤なり、

〔異本洞房語園下〕やりてぎう出所、是は以前の風呂屋より、いひ出したる言葉也、承應の頃、葺屋町に和泉風呂の彌兵衞といふものあり、彼が家に久助とて、年久しく召仕ひし男ありて、風呂屋遊女をまはし、客を扱ひしが、生得せむしにて、せいちいさき男也、たばこを好きのみし、が、他人のきせるとまぎれぬやうにとて、紫竹のふときを、長一尺八寸計りにきり、吸口火皿をつけ、常にはなさず腰にさして居たり、彼の風呂屋の家作りは、今の吉原の散茶のかゝりと同じことにて、見せの庭の隅に疊小半疊計りの腰かけ有り、此こし懸にせむしの久助が、長ききせるをさしてなをり居たる形、せむしの小男なれば、及（キウ）の字の形に似たりとて、其頃若きもの共の、久助が異名をぎうと名付、彼風呂屋が方へゆかふといふべきを、ぎうが所へゆかふ、など、いひふれしより、いつともなく總て風呂屋の男共の總異名となりたり、

〔異本洞房語園上〕禿　未だ簪せぬ小女